

## ポブベックのやさしい投資信託

### 第42回 ファンドの選び方 その4

#### (9) ファンドの選び方

##### (9-C) 標準偏差とその使い方

###### 標準偏差とは

前回、リスクとは標準偏差の事だと説明しました。では、標準偏差って一体何でしょうか？簡単に言うと**平均からのぶれ**の事なのです。下の表を見てください。これは二つのファンドの年間上昇率とその平均を計算したものです。

西暦	96	97	98	99	00	平均
Aファンド	2%	3%	1%	3%	1%	2%
Bファンド	5%	2%	6%	1%	2%	2%

どちらのファンドも上昇率の平均値は2%です。みなさんならどちらのファンドを選びますか？Aは平均値2%に対し、その上下1%の範囲内に納まっています。しかし、Bの方は、良い時には平均値より4%も高い上昇率ですが、悪い時には平均値より4%も低い上昇率となっています。Aの方が、**ぶれ**が小さいですね。平均値からの**ぶれ**が小さい方が、より確実にその平均値を達成できると考えられます。つまり、この表を見る限り、Aの方が、**より確実に**2%近い上昇率を達成できると予想できるのです。

この**平均値からのぶれ**を統計的に処理したものが標準偏差なのです。標準偏差が大きいと言う事は、**ぶれ**が大きい、つまりリスクが大きいのだと理解しましょう。

###### 標準偏差の意味

では、この標準偏差が何を意味しているのか詳しく説明しましょう。標準偏差が5%のファンドがあったとします。これは、ファンドの月間上昇率を調べてみると、3回のうち2回は(基準価額の騰落率の平均値)  $\pm 5\%$ に収まっていたという事を示しているのです。そのファンドの月間上昇率の平均値が10%であれば、3回のうち2回は、5%~15%の上昇率になるという事です。

では同じく基準価額の月間上昇率が平均で10%、標準偏差が1%だったらどうなるでしょう。この場合には、ファンドの月間上昇率が、3回のうち2回は9%~11%になるという事を表しているのです。式で表すと下式のようになります。

予想基準価額騰落率 =

過去の基準価額平均騰落率  $\pm$  標準偏差

(3分の2の確率でこのレンジ内に収まる)

例1 基準価額平均騰落率10%、標準偏差5%の場合

予想基準価額騰落率 =  $10\% \pm 5\%$   
= 5% ~ 15%

3分の2の確率で、基準価額騰落率は5%~15%のレンジに収まる。

例2 基準価額平均騰落率10%、標準偏差1%の場合

予想基準価額騰落率 =  $10\% \pm 1\%$   
= 9% ~ 11%

3分の2の確率で、基準価額騰落率は9%~11%のレンジに収まる。

(注) この指標は、年間上昇率を使っても日々の上昇率を使っても計算できます。自分で計算したい方は、エクセルのSTDEVという関数を使いましょう。

いかがでしょう。標準偏差が5%の場合よりも、1%の方が、**より確実に**10%の利回りを達成できるという事なのです。言い換えれば、標準偏差が5%のファンドよりも1%の方がリスクが低いと言えるのではないのでしょうか。

###### 標準偏差を使ってファンドを選ぶ

ではリスクが高いファンドよりもリスクが低いファンドの方が良いファンド、購入すべきファンドなのでしょうか？そんな事はありません。リスクが低い事と、運用成績の良し悪しは別なのです。

大切な事はリスクの大きさではなく、リスクに見合ったリターンが得られるのかどうかという事なのです。同じリスクであれ

ばリターンは高いほうが良い。同じリターンであれば、リスクは低い方が良い。この原則を守る事なのです。次回はこの事に焦点をあてて、ファンドの選び方を考えてみましょう。